

沙多事下 沙多事

沙多事 女 沙多事 女

沙多事 女 沙多事 女

沙多事 女 沙多事 女

沙多事 女 沙多事 女

沙多事 女 沙多事 女

沙多事 女 沙多事 女

沙多事 女 沙多事 女

沙多事 女 沙多事 女

沙多事 女 沙多事 女

沙多事 女 沙多事 女

沙多事 女 沙多事 女

沙多事 女 沙多事 女

沙多事 女 沙多事 女

沙多事 女 沙多事 女

沙多事 女 沙多事 女

沙多事 女 沙多事 女

1975年11月

山元白

長生堂
及
去
回
接
送

和生堂所

芝居

嘉永三庚戌歲申酉あきの方凡三百五十四日

大正三六八申十未十二

小二四亥五辰七卯九寅十一丑

初午 二月七日 日帯を正月一日七ツ分

彼岸 二月十五日 日帯を七月一日六時二分

社日 二月十五日 三月六日 晝八ツ九分入
八月十九日 九月十六日 全曉八ツ八分入
十月十七日 朝立ツ九分入

入梅 五月一日 月をく十月十日者九ツ分

夏至 五月十三日 玄猪 十月五日

半夏 五月廿三日 冬至 十二月十九日

二百十日 七月廿五日 寒入 十二月廿日

庚申 正廿三廿五廿八一十二十三三

甲子 二一四二六三八四十五十二六十四七

已待辰日 二一五二四三六四八五九六十七十二八十四九十六十十八十一二十十二

【本文解読文】

改春御慶申上候、弥御壮栄

御越歳被成珍重賀申上候、然者

今五日四ツ時分方麴町四丁目五丁メ

間方出火之由ニ而、折節西北風烈敷

未燃尽(申カ) 処ニ而候得者、尊家麴町

岩機様分も多分類焼坎与心配、以上

乍序、此段、申述候 (いっ連カ) 廻村拝眉

致し、可申置候、■内御同役方へ宜敷

相願申候

過日は長澤氏御出ニ付拝思大意(久遠カ)

得候(存カ)

尚宜敷相願候、以上

二月五日

太田源助

玉上甚左衛門様

尚々

先日ハ御大切之御掛物長々御預リ

拝借仕難有奉存候、旧冬乍延引

長三郎殿江相知其節書状も不差上

失敬御免被下候、乍憚皆々様へも

宜敷御言傳奉相願候、以上

(封筒)

桐生新町

御出役

年寄

太田源助

甚左衛門殿

御用向

【本文読み下し文】

改春お慶び申し上げ候、いよいよご壮栄

ご越歳なされ珍重に賀申し上げ候、しからば

今五日四ツ時分より麴町四丁目五丁メ

間より出火之由にて、折節西北風烈しく

いまだ燃え尽きず処にて候えば、尊家麴町

岩機様分も多分類焼かと心配、以上

ついでながら、この段、申し述べ候、（いずれせ）廻村拝眉

致し、申し置くべき候、■内御同役方へ宜しく

相願い申し候

過日は長澤氏お出に付、拝思大意

得候

なお宜しく相願い候、以上

二月五日

太田源助

玉上甚左衛門様

尚々

先日はお大切のお掛物長々お預り

拝借つかまつり有難く存じ奉り候、旧冬延引ながら

長三郎殿へ相知り、その節書状も差し上げず

失敬ご免下され候、はばかりながら皆々様へも

宜しくお言伝ことづて相願い奉り候、以上

(封筒)

桐生新町

御出役

年寄

太田源助

甚左衛門殿

御用向

【解説】

今回は、未読のまま出題に及びました。力不足ですが、一通りの解釈と意味は理解しましたので、世に問おうと決意しました。予めご承知おき下さい。

大意は、本目録により「麴町火災の通報」としました。当時、桐生の商人だけでなく、日本全国、津々浦々の商人は、江戸は言うに及ばず京・大坂での出来事をいち早く情報として入手しています。勿論、支店があれば支店から、取引先や街道の定宿など普段から交流のある発信元からその都度、新しい情報を、飛脚便などを通して入手していました。

この書状は、関東取締出役の太田源助から玉上甚左衛門に宛てたものですが、甚左衛門の背後には長澤氏や佐羽・書上といった桐生の顔役も含まれています。地方への巡回の予告を兼ねて、江戸麴町で起きた火災について一報しています。「火事と喧嘩は江戸の華」という言葉が流行ることから、火災は常にあつたものと推察されますが、冬季の二月ということで、嘉永三年（一八五〇）頃のことでしょうか？同封された文書の中に同年の暦が添えられていました。

話は前後しますが、この文書は、出役がお世話になっている村方に対して改年のご挨拶を兼ねて書かれたものです。このことから桐生だけではなく手持ちの出張先に出されたもので、複数書かれたものと思われます。出役の仕事はほとんどが出先（地回り）で暮れから正月にかけて江戸で過ごします。急いでいたのでしょうか、文字は殴り書きのもので読みにくく、苦戦しました。これといった難しい用語はないのですが、文字の読解が数ヶ所出来ませんでした。よって、前後の文意の流れから判断した用語ですが、補いましたので、ご承知おきください。心もとない解説で失礼します（笑）。

古文書学習は、現時点で苦戦しても、将来的に、「あつ、あの文字だ」と分かる場合もあります。いったん時間を置くことも必要です。楽しみながら続けていきましよう。

【用語解説】

*改春（かいしゅん）：新年の挨拶の冒頭に使われた。年が改まっつての意。改年。

この場合、節分を境に立春と言ったので、同封の暦も初午が二月七日としている。

*越歳（えつさい）：「えつねん」と読みたいのだが、歳に「ねん」という表記がないので「えつさい」とした。無事に年をこしたことをいう。

*尊家（そんけ）：主家筋の家や取引上の家など尊称している場合に用いる。

*岩機様(いわきさま)：麴町に屋敷を構える「岩〇」氏は誰であろうか。最初に本文書に接した時、次の文字を【様】と読み、しかも手偏と木偏の入り方に惑わされ、この段階でも確定できない状況にあったので、岩に続く文字を探した。麴町五丁目・六丁目、甲州道中沿道の町屋街で商売をしていたのは、糸物問屋岩城升屋(井口喜兵衛)・真綿問屋(升屋九郎右衛門)・綿問屋(升屋九右衛門)、そして呉服問屋岩城升屋店である。彼らは幕府奥向き、日光山や久能山の御用達でもあった。旗本では、岩瀬・岩佐・岩手・岩名。岩のつく旗本はいるものの文中の「岩」に結び付かない。玉上家は奥州磐城と関係が深いことから岩城とした。

*太田源助(おおた・げんすけ)：『寛政重修諸家譜』によれば、源助からは資周(すけちか)の名を見出せる。戦国期に活躍した太田道灌の流れを組む武士だろうか？諱の「資」を通り名としている。年代からしてこの源助は、父親かもしれない。

引用は『古文書用語辞典』(柏書房)・『日本歴史地名大系13』(平凡社)ほか